



【2013-04-20】  
裏土御門 陰の長者  
「幕末動乱編」

---

連載第5回  
第5章「井伊大老」  
第6章「勅使江戸下向」

---

虹岡 思惟造

---

## 第5章 井伊大老

堀田の後を継いで大老に就任したのが、かの井伊直弼であった。井伊直弼は彦根藩の第十五代藩主であり、名門譜代大名として幕閣に連なっていた。彦根井伊家の始祖は、徳川四天王の一人として有名な井伊直政であり、その後連綿として譜代筆頭としての家格を誇っていた。



直弼が大老に就任した時は、問題山積というべき状態であったが、中でも大きな問題が二つあった。日米通商条約の締結と将軍継嗣に関する問題である。

一つ目の問題の日米修好条約について、直弼は孝明天皇の勅許を得ずに条約調印やむなしとの指示を配下の奉行に下す。これ以上、問題を先送りにすると列強による武力侵略が現実のものになる危惧があったからであり、待ったなしの状況下での決断であった。そして二つ目の将軍継嗣問題は、いわばお家騒動のようなものではあったが、これまた大変厄介なものであった。

時の将軍は第十三代の徳川家定であった。家定は幼少より病弱で言動も定かではなかったが、将軍就任後は更に病状を悪化させて政務を満足に行えなかった。その正室として島津家から篤姫が嫁いでいたが、子はなく、その後継者問題が江戸幕府における重要課題となっていた。島津斉彬・松平慶永・徳川斉昭らの有力大名は、大事に対応できる将軍を擁立すべきであるとして斉昭の実子である一橋慶喜擁立に動いた。これに対して直弼など譜代衆と大奥は、家定に血筋が近い従弟の紀伊藩主徳川慶福（とくがわよしとみ）を擁立して激しく対立した。

そのような対立騒動の最中に直弼は大老に就任したのだが、時を同じくして家定の病状が急変し重体となる。安政五年（1858年）六月、直弼は家定の意向であるとして、後継者を慶福にすると発表する。そして七月に家定が没すると、慶福は家茂と改名して第十四代将軍となったのである。二つの大問題に矢継ぎ早に断を下した直弼の胆力は、これまでの幕府要人と比べて突出したものであった。

そのような混乱を経て、家茂が新しい将軍になることになったのだが、その為には、朝廷による将軍宣下が必要であり、勅使が派遣されることになった。その勅使に選ばれたのが、侍従の高倉永祐（たかくらながさち）と陰陽寮頭の土御門晴雄であった。

将軍宣下は、江戸時代の初期においては、京都の伏見城や二条城で行われたが、中期以降になると勅使が江戸城に赴き行われるようになっていた。今回の将軍宣下も東海道を下って陸路江戸に向かうようになっていたが、晴雄はどうにも道中が心配であった。と言うのも、無勅許の日米通商条約に孝明帝が激怒し、朝廷の攘夷に懸ける想いは益々先鋭化しており、将軍継嗣問題で敗れた水戸、薩摩や、土佐、長州など勤皇派の台頭著しい藩内では、不満が膨張していた。世情が騒然とする中、これらの分子が結託すればどのような大事件に発展するか予断を許されない状

況だったからである。

将軍宣下の勅使の護衛は幕府の役目で、嚴重に実施されるだろうが、道中の宿舎内や江戸城内における身辺警護に充分目が行き届くのか晴雄は不安であった。そこで白羽の矢が立ったのが溥明というわけであった。武術に優れた溥明が、常に身辺にいてくれればこんなに心強いことはない。溥明は六位蔵人という官位を有するため正式な勅使の随員として、江戸城内にも同行できる身分であった。そのような事由から、溥明が勅使の一行に加わることを、晴雄は朝廷に強く願い出て、聞き届けられることになったのである。

溥明の父、晟義はこれを機に、裏土御門家に伝わる式神遣いの法を溥明に授けることにした。幕府と井伊大老の権威失墜を狙った勅使襲撃計画が企てられているとの噂が、まことしやかに飛び交う状況の中、万一のことを考えると、溥明の剣術の腕前だけでは心もとないと判断したからであった。

呪法の伝授は安倍屋敷の御霊屋でなされることになった。勅使出立までの短い間に式神遣いの法を遺漏なく伝えることが出来るかどうか懸念した晟義であったが、なんと一両日もするかしないうちに、溥明は式神遣いの方を会得してしまったのである。溥明が、陰陽師として並はずれた資質に恵まれていることが証明されたわけで、晟義も満足であった。

溥明は会得したばかりの、式神遣いの法で、犬麻呂と牛麻呂を試みに召喚したが、幼いころから慣れ親しんできた溥明が新しい主人になるのを知った犬麻呂と牛麻呂は喜んで忠誠を誓うのであった。

## 第6章 勅使江戸下向

安政5年（西暦1858年）11月、高倉永祐と土御門晴雄の二人を勅使とする一行は、京都を出立した。行列は総勢二百名ほどの大行列である。その前後は幕府の警護の兵が固め、行列の中央を、勅使が乗る二台の輿と雑色四人に担がれた勅書入りの大櫃が進み、その後を旗持ち、傘持ちなど諸道具や挟み箱を担う者が続いた。溥明は近衛武官の装束で騎乗した。轡取りは神埼吉蔵である。又、行列には加わっていないが、幕府伊賀組の者共が、目立たぬように周囲に配されていた。ある者は商人、又ある者は虚無僧姿などをして、怪しい動きをする者がいないか目を光らせていたのである。

京都を出立して最初に宿泊するのは、草津である。草津は、東海道と中山道の分岐点であり両方の宿場町を兼ねていた。その為、非常に賑わいのある街で本陣と脇本陣がそれぞれ二軒あり、その他の宿泊施設も整備されていた。勅使は、七左衛門本陣に止宿し、他の者は脇本陣などに分宿する。溥明は正式な随員であり、勅使の身辺警護役でもあったから、当然、勅使と同じ本陣に泊ることになった。旅の初日ということもあり、早めの草津宿入りであった。



溥明が自分に宛がわれた部屋で一息入れていると、使いが来て、晴雄の部屋に来るようにとのことであった。晴雄の部屋には、高倉卿と晴雄が上座に、下座には、二人の武家姿の者が控えていた。大柄で年配の武士は、行列最高責任者である大久保甚衛門であり、年若で小柄の者は幕府伊賀組の組頭を勤める柘植尚賢であった。大久保は大身の旗下で、道中奉行並として幕政に連なる身分の者である。

「寛ぎおるところ呼び立てて、ご苦労じゃが、警護について大事な話があるということだな」

晴雄は部屋に入って着座した溥明に声を掛け、次いで控えている二人の武士を見やり頷いた。「本日は旅の初日でお疲れのところ、お手間をとらせ恐縮至極に存じ上げます。これなるは、柘植尚賢と申し、道中伊賀組の宰領を勤める者に御座います」

大久保が、口上を述べ傍らの武士を紹介する。

「うむ、その方が伊賀組の頭領であるか。役目大義におじゃる」

高倉卿が鷹揚に声を掛ける。

「勅使のお二方様にはお初にお目にかかります。拙者伊賀組宰領役の柘植尚賢と申します。以後お見知り置きのほど願わしゅう存じ上げます」

年の頃は、四十前後か、瘦身ながら筋肉質で、鍛えあげた身体つきをしている。生え際の髪やもみあげが縮れているのは面擦れによるものであろう。溥明は警護の役目柄、出立前に何度か面談していて、柘植が神道無念流の達人であることも承知していた。

「うむ、道中警護のこと、伊賀組の働きを頼みにしておる。して警護上の大事な話とは、なんや

」

晴雄に促されて、大久保は、柘植に話せとの仕草をする。

「しからは申しあげます。実は道中に不穏な動きありとの江戸表よりの急使が御座いました。勅使のお二方様にお知らせするべきかどうか案じましたが、万が一の備えのために、お耳に入れて置くべきと思案し、かく参じました次第にござります」

「うむ、そのようなことなれば、勅使たる我等も知っておかねばならないことであろう。詳しく申し聞かせよ」

晴雄に促されて、柘植が語ったその概要は下記のようなものであった。

“このところ全国各地で攘夷派の活動が活発だが、わけても過激なのが、水戸藩の攘夷派である。将軍継嗣問題で、井伊直弼に敗れ、藩主の徳川斉昭が江戸屋敷での謹慎を命じられたことや、勅許を得ずに米国と通商条約を締結したことなどに、藩士の多くが悲憤慷慨した。水戸藩内で激派とよばれる最も過激な者たちは、この際に、暴発、挙兵して、攘夷の先駆けになろうとの案が練られていた。具体的には開港地の横浜を焼き討ちにし、異人を追い払おうという企てであった。その挙兵にあたり、江戸に下向してくる勅使一行を襲い、公家の二人を推戴して勤皇攘夷の兵を募ろうと言う計画である。又、この計画には勅使が江戸に着かなければ、将軍宣旨ができなくなり、井伊大老に与えるダメージが大きいとの思惑もあった。水戸激派にとってはまさに一石二鳥の企てであった。”

柘植の報告を聞いていた二人の公家は、勅使一行を襲う計画と聞くと、にわかに強張り、引き攣った表情になった。

「それは、ほんまのことであろうの？」

不安げに高倉卿が問う。

「うむそうじゃ、根も葉もない噂ばなしではないのかえ？」

一抹の期待を込めて晴雄が続ける。

「このような動向は、水戸藩内に潜入している幕府隠密のお庭番衆が、逐一知らせてまいります。決して根も葉もない噂ではありません」

柘植は確信に満ちた態度で言い切り、二人の公家とそして溥明の顔を見詰めた。

先ほど来、一言も発せず脇で控えていた溥明が言葉を挟む。

「実は水戸藩の動きについては、朝廷側の警護役として私なりに情報を集めておりました。しかし、勅使出立前は、これほどには切迫しておりませんでした。そのため、いらぬご心配をかけまいと、お二方様には申し上げませんでした。想像以上の速さで事態が煮詰まったのでございましょう」

「その通りです。我ら幕府側も勅使御一行の江戸下向に合わせて、挙兵するとは思っておりませんでした。激派が、実力で水戸政庁を押さえたことにより、事態は一気に動き始めました」

「うむ、ようわかった。容易ならぬ事態であるな」

「ほんに、ほんに、勅使を襲うなど前代未聞の恐ろしき所業じゃ」

二人の公家が口々に叫ぶ。

「挙兵計画について、具体的な動きはあるのでしょうか」

溥明の問いかけに柘植が、一步膝を勧めて返答する。

「激派の者どもは、三々五々、水戸を離れて、関東諸国に赴き密かに兵を募るなどの準備をしている模様にご座います」

柘植の言に、二人の公家は、もう戦々恐々である。

「うむ、して勅使襲撃はいつどこで行おうとしているのかの」

自分たちが襲われることが何よりも心配な様子の高倉卿が問う。

「そこまでは、幕府隠密も掴んではおりませんが、襲うとすれば、道中の難所かと」

「東海道の難所と言えは、大井川の渡しか、箱根の山！」

晴雄が思わず叫ぶ。

「東海道のことは、役目柄、良く存じておりますが、大井川は難所なれど、潜み隠れる所がありませぬ。又、襲うた後の逃げ場も無きことから、先ずもって襲うとすれば箱根山中かと。箱根山中なれば、潜む所も、逃げ道も沢山あります。」

道中奉行並の大久保の言葉に頷く二人の公家であったが、すっかり怖気付いてしまい、更なる警護体制の強化を口々に言い立てた。大久保は、勅使の意向を井伊大老に報告し、更に万全の態勢を整える旨を約束し、柘植とともに部屋を退出した。

～次号に続く～